書評・新刊紹介

大谷亨著『中國の死神』

朝山明彦

高帽子に長い舌をベロンと出した中國の死神。現在の中國で祀られる無常の姿を寫した本書の表紙には、誰もが度肝を抜かれ、好奇心を持つものである。

神としての關羽（關帝）を研究してきた評者にとって、中國の神と言えば、關帝のみならず、玉皇大帝や東嶽大帝、媽祖や城隍神といった、いわゆる階層制度に位置附けられた神々を思い浮かべる。そういった神々は、雛壇飾りのように行儀良く鎮座する神々のイメージが強い。

ところが、本書の著者大谷氏が追いかけ捉えた無常は、上記の神々とは少し異なる。おどろおどろしい外見のみならず、無常とは神なのか精靈なのか妖怪なのか。頭の中がゴチャゴチャになる疑問を抱かせながら、讀者に表紙をめくらせる力が本書にはある。以下、本書の內容を章ごとに紹介する。

まず、「まえがき―なぜ無常なのか」で、著者が無常の研究に至った經緯を述べる。そこには本書を形作った著者の二つの感覺が示される。一つは、著者の言葉で「ビビビッ」という直感があったとの表記が使われる。表現を變えれば、雷に打たれたような衝撃であるが、著者流に言えば「ビビビッ」から無常研究に取り組むよう

になったという。もう一つは「ウルトラマンの卵」という著者のエピソードが引かれる。著者が子供の頃北京に住んでいた時、異形のウルトラマンの姿をした遊具からゆで卵が出てきた原體驗で、この事件により著者は中國の「ビビビッ」とした側面に向き合っていったという。

「序論　謎多き無常」では、著者が「點石齋畫報」から無常に出會ったことを述べていく。無常とは視覺イメージとして白無常と黑無常がペアになっていることが多いこと、ともに高帽子をかぶっていること、日本では無名だが中國では魯迅が注目していたことなどを擧げる。そして、中國に赴いたフィールドワークを中心に、無常に對する理解を深め謎を解決していく本書の構成を紹介する。無常との向き合い方を「採集」・「觀察」・「考察」という項目に分けて、まるで昆蟲採集に向かうような章立てとし、途中に「無常珍道中」という紀行文を織り交ぜての構成となっている。

「第一章　無常を採集する」では、無常調査の基本裝備として十九の項目を擧げる。「文庫本」や「タバコ」で現地の人とコミュニケーションをはかるなど著者の調査に於ける技が示される中、面白いのは十九の項目のうち十八番目の「小麥粉」である。石碑の文字を鮮明化するために「小麥粉」をもちい、「やや自嘲氣味に小麥粉學派」と名乘るなど、機知に富んでいる。これらの裝備を踏まえて、「廟」・「祭り」・「口頭傳承」の三項目の調査解說がなされる。

一つ目の「廟」での無常の神像を撮影することは、調査の中で最も難易度が低い。無常には樣々な形態があり、その多くは城隍廟や東嶽廟にいるという。餘談だが、評者が注目する關羽を祀った關帝廟では、管見の限り無常を見たことがない。昆蟲でも集まりやすい木があるように、無常が集まりやすい廟が城隍廟や東嶽廟なのだろう。著者は、城隍廟・東嶽廟の無常として十四の事例と、その他の廟の無常として六つの事例をカラー寫眞で紹介する。評者はこれらの寫眞こそが本書の最大の見せ場であると考える。著者の大谷氏が足で稼いだ現代中國に於ける生の無常の姿がそこにはある。白無常も黑無常も本當

に廟によって様々である。

二つ目の「祭り」での無常採集は「迎神賽會」という神輿のねりあるきの機會である。この祭りは不定期なものが多いが、農暦を用いた各廟の祭神の誕生日に行われることが多い。著者は金門の迎城隍を取材し、黒白無常のペアの他にさらに黒無常がいる形態、「ひときわ短軀のブサカワイイ黒無常」の存在に出會っている。それは、東嶽大帝の部下である長軀の顔督察使と短軀の柳督察使のペアがいる他に、かつて柳督察使として使われた型を復活させ、姓と役割を與えられた新たな存在としての甘將軍という無常の存在を示すものである。つまり、この甘將軍は現場の「祭り」の中で生まれた、新たな無常の例である。同様の事例は、本書の福州の「九案泰山十三鄉巡遊」でも紹介されている。

三つめの「口頭傳承」での無常は、採集しやすい神として語る無常と、採集しにくい鬼として語る無常に分けられる。先學が口頭傳承を採取して殘したように、著者がフィールドワークから集めた口頭傳承の事例を述べる。

次に、「第二章　無常を觀察する」では、もともと黒無常はいなかったとする無常イメージの變遷が述べられる。ここで示される無常のグループ分けは、多數の無常を實際に目にしてきた著者の研究の獨自性である。すなわち、「白無常と黒無常がペアのタイプ」と「白無常がソロのタイプ」である。その結果、「白無常はソロで存在しうるが、黒無常は白無常とのペアという形式でだけ存在可能になる」という著者の假說を實證している。それはそのまま無常の歷史を明らかにするものであり、無償の勸善書として配布された（古いものはレア物として高價な）『玉歷鈔傳』にあらわれている。『玉歷鈔傳』には、清刊本と民國刊本の相違として無常のイメージを次のようにまとめる。すなわち、清刊本では白無常がソロか不特定の相方とペアとなるが、民國刊本では黒無常が登場し、黒白無常という無常イメージの統一化がなされ、現代でも踏襲されていることが示される。その上で、著者は無常イメージの原型が誕生したのは宋代まで遡るとするが、本書で扱う無常は清代中期に誕生したものと推定

している。

そして、黒白無常の性格の相違を明らかにし、無常信仰の發展原理を讀み解くために、福建省厦門市翔安區馬巷城隍廟の事例を擧げる。無常には、長軀の白無常は謝必安といって「感謝すれば必ず安寧」をもたらす褒賞の神であり、短軀の黒無常は范無救といって「罪を犯せば救いなし」という懲罰の神である謝范傳承がある。實際は白無常の方が人々に慕われているという。それは白無常は「迎福攘災」を發揮するものだからである。その白無常である謝必安をさらに探求すると、現地の「保長公」という神に辿りつく。この「保長公」とは謝必安と完全一致ではなく異同があり、著者は前者は「鬼に類する底邊の神」たる野神であり、後者は「眞っ當な神」たる正神に分類できるとする。さらに、東南アジアに目を轉じて、華人の無常信仰の事例からは、本質的儀禮であるソロの白無常と、形式的儀禮であるペアの黒白無常は相互的に作用しあっていることを述べている。

最後に「第三章　無常を考察する」では、いよいよ無常の誕生に迫るものである。まず黒無常では摸壁鬼というバケモノに着目し、「申報」や筆記、民俗舞踏の記載を辿る。また白無常では山魈というバケモノに着目し、勾魂や帽子、二元性をめぐる類似を檢討する。清代中期に突如誕生した無常は、從來の役人風の勾魂使者イメージと異なるまったく新しいものであったが、その來歴は山魈というバケモノにあった。つまり、無常は勾魂使者と山魈の化合により生じたものであったとする。

「結論　つまるところ無常とは」で、無常とは勾魂使者の歴史を踏まえた「バケモノ的勾魂使者」であり、摸壁鬼とペアになって冥界組織に組み込まれた。そして、ペアの黒白無常とソロの白無常が相互作用することで、神の階梯において、無常の地位は上昇していったと結論附ける。

以上、讀了して感じた本書の意義は、①中國の死神たる無常にスポットを當て、それを日本に知らしめたこと、②その無常にはペアの黒白無常やソロの白無常のように類型があること、③そして、無常の原點は山魈という中

國古來のバケモノに行き着くと推定したことである。各章に著者の考え方の行程をまとめたり、遊び心に富んだ構成や記述があり、讀者に對する工夫と著者の熱意が隨所に傳わってくる。

その上で敢えて指摘したいのは、本書には文獻學的データが少し不足している感がある。例えば、第一章では多くの城隍廟や東嶽廟に見られる無常の姿を列擧するが、城隍廟の創建年代や祭神（城隍廟は廟によって祭神が異なる）などによって無常に差が出てくるのか、或いは迎神賽會は記錄ではいつ頃から始まり、擔い手はどのような人々なのかを知りたいところである。城隍廟については、著者が引く濱島敦俊氏のみならず、制度研究の小島毅氏［一九九〇］「城隍廟制度の確立」（『思想』七九二）や歷史研究の水越知氏［二〇一六］「城隍出巡」祭禮と中國近世の都市空間」（『關西學院史學』四三）など先學の研究蓄積が相當あるので、それらを研究に取り入れて慾しい。

また、著者は無常の「採集」という表現を使う。もし昆蟲採集であるならば、採集した木の種類や當日の氣候、或いは近隣の自然などをデータとして收集するはずである。無常研究も同樣に、「採集」に關する周邊の情報をもっと深く取り入れることで、研究の厚みと說得力が增すのでは、と評者は考える。

そして、著者は中國妖怪學の構築を願っている。中國では『山海經』や志怪小說の部類など怪異譚は枚擧に暇がなく、その中で無常をどのように扱い、位置附けるのか。妖怪・化物・靈異・神話の線引きをどこにするのかなど、今後の研究への興味は盡きない。

本書は、著者が上梓した博士論文を一般書として書き下ろしたもので、目を引く圖版や口語的な表現が多く、專門外の人にも手に取りやすく、ＳＮＳでのレビューも高評價が多い。より專門的學術的見解を知りたい人は、東北大學機關リポジトリで一般公開する著者の博士論文「無常鬼の研究―〈精怪〉から〈神〉への軌跡―」を御覽いただきたい。

著者は今も中國に滯在し、どこかに潛む無常を精力的

に追いかけている。さらなる「採集」の成果と次回作に、期待とエールを送りたい。

（A5版、一八七頁、二〇二三年七月、青弓社、二六〇〇圓（税別）、なお本書には電子書籍版もある）